

トルコの再生産労働市場の変化 ～外国人移民労働者の参入を受けて～

東京外国語大学 研究員

金井佐和子

国を超えた出稼ぎ女性労働者によるグローバルな規模での再生産労働への参入は、近年、トルコの再生産労働市場においても同様に見られるようになってきている。

従来、トルコにおける再生産労働市場の中心的存在はトルコ人女性であり、都市部の中・上層階層の外部化された再生産労働の主な担い手となってきた。とりわけ第二次世界大戦後の都市化と、それに伴う農村部から都市部への人口移動の結果、都市部に形成された社会的階層の下層に属する女性たちは、都市社会における周縁的な位置づけや、教育、職能の不足、家族や親族、近隣コミュニティの保守的な慣習やジェンダーのバイアスによって、いかに経済的に厳しい状況にあっても、彼女たちの外での労働行為は正当化されることは困難であった。こういった中、彼女たちに可能な選択肢は、家事という女性のジェンダー役割にも反しない就労内容と、他人ではあっても家庭という職場環境、さらに特別な技能も必要なく、地縁・血縁の者による紹介によって仕事が斡旋されるといった諸条件を有するインフォーマルな家政サービス業への従事であった。

しかし、90年代以降、ソ連崩壊に伴いヨーロッパの旧社会主義国や近隣のチュルク系諸国といった国々からトルコへ出稼ぎに来る女性が見られるようになり、彼女たちの多くはインフォーマルなかたちでトルコの再生産労働市場へ参入してきている。こうした移民女性たちは東南アジアの出稼ぎ労働者などと同様に、単身でトルコへやってきて都市の中・上層家庭に住み込み、清掃や洗濯、食事作り、ベビーシッター、高齢者や病人の介護といった家庭内の再生産労働を担っている。

本発表においては、こうした移民女性労働者の流入によるトルコの再生産労働市場における変化を、従来のトルコ人女性労働者と新たな移民女性労働者の就労に至る背景や就労内容といった点を比較しながら、双方の労働者が都市の雇用主のニーズの多様化とともに再生産労働市場の中で共存している実態について考察する。